

ぎふ地域の絆づくり 支援センターだより

地域で活発な活動団体を紹介します!



清流の国ぎふ

岐阜県環境生活部県民生活課
ぎふ地域の絆づくり支援センター
〒500-8570
岐阜市数田南2-1-1 (県庁6階)
電話 058-272-8199

第24号

令和2年3月発行

31 加子母むらづくり協議会 (中津川市)

活動地域：中津川市加子母地域全域

事務局：加子母総合事務所内

会長：中島 紀子

地域の概要

加子母地域 (旧加子母村) は、岐阜県の東部、中津川市の最北部に位置し、平成17年に中津川市と合併した地域である。面積の94%を山林が占め、農業、林業、木工業を主な産業とする、豊かな自然に囲まれた農村地域である。

世帯数：971世帯 人口：2,748人 高齢化率：40.7% (令和2年1月1日現在)

団体の概要

会 員：加子母地域全住民

設 立：平成24年7月

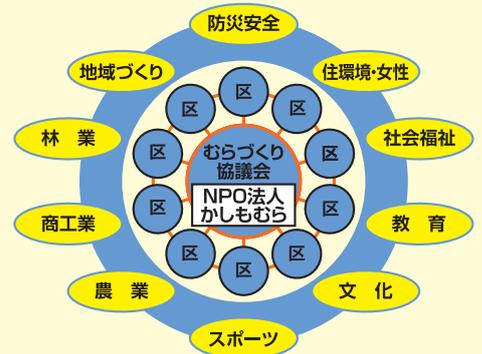
経 緯：平成17年に中津川市と合併した際、時限的に設立された「地域審議会」が前身組織である。合併後の地域活動、広報機能の縮小等により、コミュニティ機能の低下が懸念されたことから、「地域審議会」廃止後の平成24年に、自主的に地域運営に取り組むための組織として発足した。平成27年には、協議会の経済的基盤の安定化を図るため、「NPO法人かしもむら」を立ち上げた。

組織の運営体制

同協議会は、10の区 (区長会) と、PTA、老人クラブ、スポーツ少年団、消防団、森林組合等約150の地域活動団体が属する10の分科会 (防災安全、住環境・女性、社会福祉、教育、文化、スポーツ、農業、商工業、林業、地域づくり) で構成されている。

同協議会で決定された方針や活動は、区と分科会が連携し、地域が一体となって活動している。

また、地域放送、域学連携、文化・芸術、観光振興等、「NPO法人かしもむら」の定款に定められた事業に該当する場合は、「NPO法人かしもむら」が中心となり事業を行う。



主な活動

1 NPO法人かしもむら事業

● かしも明治座の管理・運営及び自主事業

指定管理者として市から委託された「かしも明治座」の管理・運営を行うとともに、手ぬぐい等の物品販売や施設案内ガイド体験等の自主事業を展開している。自主事業では、加子母の方言を用いたLINEスタンプ作成 (将来的に販売を視野)、「かしも明治座」を長期的に維持保存するための財源確保を目的とした屋根の檜板販売等、従来の指定管理者業務にとどまらない、独自の活動にも取り組んでいる。

● 地域放送構築・普及事業

加子母独自の生活インフラを構築するため「加子母広報支援システム」を独自に開発し、行政情報のほか様々な地域情報を伝える地域放送と、高齢者の買い物支援等を行う生活支援システムの管理・運営を行っている。

● コミュニティバスの有償運行

市の業務委託を受け、加子母地域内で有償コミュニティバスの運営を行っている。

乗り換えなくても、病院、ショッピングセンター、行政機関に行くことができる使い勝手の良いルートであることから、利用者も多く、交通弱者である高齢者等、地域住民の生活の足として欠かせない交通手段となっている。



かしも明治座



コミュニティバス

●軽トラ朝市の開催

観光客と地域住民の交流や、高齢者の生きがいづくりを目的とし、6月から12月の第3日曜日に、農産物や工芸品、住民の手作りの品などを販売する市を開催している。

出店者、来場者も年々増加しており、毎回、加子母地域内外より多くの人が訪れ賑わっている。



軽トラ朝市の様子

2 域学連携事業 ～加子母がキャンパス～

加子母地域は、若者、特に大学生にあたる年代層が非常に少ないことから、若者に加子母に来てもらい、加子母と関わりを持つことで、加子母に愛着を持ってもらい、加子母が若者にとって魅力的で住んでみたい地域となれるための活動を、地域と大学が連携し行っている。

そのうちのひとつ、「かしも木匠塾」は、毎年夏に全国の大学のから学生が集まり、合宿をしながら、地元業者の指導の下、地域の要望に基づき、バス停、東屋、自転車置き場等の木製構造物を制作するもので、今年度は、8大学から約300人が参加した。その他にも、学生が1ヶ月程度加子母地域に滞在し、自分たちのテーマに沿った活動を行い、地域づくりの提案を行う活動を行っており、毎年、延べ4,000人以上の学生が加子母を訪れている。



かしも木匠塾のみなさん

3 「加子母教育の日」事業 ～大人から子供へ伝える～

加子母地域は、明治時代に編さんされた「加子母村是」にも、「村づくりは人づくり」と記載されているほど、古くから教育に力を入れてきた地域である。

高校進学を機に加子母を離れる生徒も多いことから、子供たちに地域への愛着を育む取り組みを積極的に行っている。

「加子母教育の日」は、「加子母の子どもを地域で育てよう」をテーマに、毎年11月の最終日曜日に地域住民が講師となり、地域について学ぶ参加型授業参観である。

今年度も「加子母の昔話の読み聞かせ」、「明治座・歌舞伎」、「加子母の農林業」、「地震、洪水等の災害」等、学年ごとのテーマに基づいた授業が行われ、保護者とともに多くの住民も参加した。



加子母教育の日の様子



課題と今後の方向性

高齢化が進んでおり、特に子供と若者（20代、30代）が少ないことから、この先の担い手不足が懸念されている。そのため、子育てしやすい環境づくりや転入者を増やす取り組みについてチームをつくり取り組んでいる。

今後は、空き家対策、義務教育学校を導入する活動等にも力を入れていきたい。

課題は色々あるが、加子母地域には、「地域の問題はみんなで助け合いながら地域で解決する」という精神が根付いており、住民が一体となって地域づくりに取り組む雰囲気がある。

自立した地域社会を作っていくため、今後も「地域づくりは人づくり」をモットーに、「オール加子母」体制で地域づくりに取り組んでいきたい。

令和元年度 農林水産大臣賞を受賞

加子母むらづくり協議会の活動が、農山漁村における「むらづくり」のモデルとなる優良事例として、「令和元年度 豊かなむらづくり全国表彰事業」農林水産大臣賞を受賞されました。

〈加子母むらづくり協議会 中島会長のコメント〉

今回の受賞は、加子母地区民が、産業、経済、文化、伝統、教育等の全分野においての活動を評価された結果だと思う。今後も積極的に前向きに考え、行動していかねばならない。みんなで良く考え話し合い、力をあわせて仲良く頑張っていきたい。



表彰式の様子

取材後記

「人口約2,800人の小さな農村地域で、なぜこれだけの活動が行えるのか」そんな疑問は、協議会事務局の方々の話を伺うことで解消した。加子母地域には、古くから「地域の問題はみんなで助け合いながら地域で解決する」という精神が根付いており、これが土台にあることで、協議会で決定した新たな方針、活動等も、区や班を通じて説明すれば、最終的には「地域のためなら」と住民の理解が得られるという。また、協議会の活動状況は、各区長から班会等を通じ細やかに伝達されるとともに、毎月発行する広報紙「かしもむら協ニュース」等による情報発信により、活動の見える化が図られており、協議会活動は、地域住民にとって身近な存在となっている。

併せて、自分たちで地域をよくしていきたいという志をもった人材も多く、協議会も地元住民や転入者の分け隔てなく積極的に活動に巻き込んでいる。古くから地域に根づく精神とともに、若者や転入者からの意見もどんどん取り入れる柔軟性、積極性が、むらづくり協議会の様々な活動を発展させる原動力ではないかと感じた。